

「母乳育児奮闘記」

さかいたけお赤ちゃんこどもクリニック 塚 武男

第 20 回 あるお母さんの悩み

ある日お母さんが赤ちゃんを連れて私の外来へ相談に来ました。

- ・赤ちゃんは男の子、在胎40週4日で出生、出生体重3,630g、正常分娩、ApS：8/9、第二子で4歳のお姉ちゃんがあります。

来院時は5ヶ月で、体重5,935g、身長60.5cmでやや小柄。発達は問題なしで、定頸OK、目手口の協調OK、仰臥位の移動OKでした。相談の内容は

1. 体重が増えない。近くの小児科で2週毎に体重測定に通っている。このまま体重が増えないと、大きな病院に紹介して隠れている病気がないかどうかを検査して点滴を受ける必要があると言われている。
2. 2－4時間毎に母乳を飲ませているが日中は母乳を少ししか飲んでくれない。
3. ミルクを足すように診察の度に言われるが哺乳瓶を嫌がって飲まない。
4. 町の助産師からは5分でもおっぱいを飲ませるように言われている。
5. 夕方は泣いてばかりで寝てくれない。
6. 鼻が詰まって苦しそうだ、等々。

お母さんは育児に一生懸命だが、体重の増えが全てと考えているらしい周囲の医療者からは肯定的な評価はもらえず、お母さん自身も赤ちゃんへの自分の対応をすべて否定的に捕えるようになっていたようでした。その結果、自分は母親失格だと考えるようになり精神的にもかなり参っているようにみえました。診察にはご主人も一緒に来られ、私が話を聞いている間はご主人が赤ちゃんを抱っこしてくれていました。ご主人もとても心配している様子がうかがわれました。

- ・赤ちゃんは診察の時にお母さんに抱っこされると安心しているようで、その他隠れた病気なども無く、しっかりと育っていると思われました。

まず、その事をお話し、お母さんは赤ちゃんのためにととてもよく尽くされていること、体重はそれだけが全てではなく、少しずつでも増えていればいいこと等をお話し、離乳食を始めることを勧めました。お母さんは離乳食は遠い先のことと思っていたようで「もう始めていいんですか」と少しびっくりしていましたが「やってみます」と頷いてくれました。それから1ヶ月毎に診察させてもらうことにしました。

- ・次の6ヶ月時には「随分気が楽になりました、おっぱいもよく飲んでくれています」と話され、7ヶ月時には体重7,300g、身長66.8cmと大きくなっていました。発達は独座OK、腹臥位の移動OK、喃語OKで問題ありませんでした。

堺：体重増えてるね。今母乳何回？ミルクは？

母：私、ミルク足していません。

堺：あ、そうだ母乳と離乳食だよね。

このお母さんの自信を持った受け答えに接して、私は「あ、もう大丈夫だ」と思いました。

母：離乳食2回にしているんですが、あまり食べないんです。

堺：焦らないでいいよ。ゆっくりゆっくり、離乳食で大事なものは待つこと。人より早く食べたからって別に偉くなるわけでもないから。

そして8ヶ月にはよく食べるようになりました。

- ・仙台市外の遠方の方だったが、1歳時にお母さんから

母：先生、私もう大丈夫です。先生の外来卒業していいですか？

堺：よかったね、また何か心配なことがあったらいつでも言ってね。

医療者の一言について

このような自分の悩みを何とかして聞いてもらおうとして来られる家族や本人に接する時、医療者は自分が発する言葉に深く注意しなければなりません。医療者の一言はもろ刃の刃で、励ましのつもりで発する言葉が実は相手を傷つけており、その事に医療者は気が付かないことが多いからです。その多くは医療者は知識を多く持っている（間違った知識のことも多いが）という意識から、上から目線になってしまい「教える、告げる」という指導的姿勢になることがその原因だと思います。大切なことは母親の育児姿勢や赤ちゃんの状態を決してone pointで判断しないことです。そして母親に不安、特に焦りを与えない共感、支援の姿勢が何よりも大切です。

医療の現場では、緊急を要することは勿論多々あります。その時は緊急事態であることをしっかりと告げなければなりません。しかし、そうでない時は家族と共に待ちの姿勢を持つことが大切になります。

それを知ることも医療者の大きな責務であると思います。